

上海から成都へ 華西医科大学 I



早朝、ホテルの窓をあけると、眼下に広い街路が一直線に伸びて、はるか遠方が霞んでいた。路の両側を自転車の列が、郊外から途切れなく延々と列なる。「あー中国だあ」と、私は感嘆した。1985年12月3日、上海の外国人専用のホテルである。開業したての新築だが、手抜きが目立つビルだった。

私たち一行4人は、その日、上海第二医科大学を訪問した。同大学手配の公用車で、市内の目抜き通りを走った。のちに“上海銀座”とよばれる街並みは、日本の田舎の駅前通りのように侘しい。車も信号も少なく、公用車は、クラクションを鳴らして、あふれる雑踏を掻きわけて進んだ。

同大学の通訳の陶 粟嬾さんが、心細い私たちの唯一の頼りだった。上海外国語学校をでた彼女は、来日経験もないのに、正統な日本語を流暢に話した(のちに、彼女は客員講師として本学に留学する)。

当時、日中国交回復して十数年、文化大革命の余燼のくすぶる時期であった。外国人の姿は少なく、外国人用紙幣が使われていた。私たちは、得体の知れない不安と緊張を強いられた。

ようように辿りついた上海国内空港は、文字通りごった返していた。飛行機の自席に身をゆだねたとき、座席の背の一部がガタンとずれ落ちた。私は、身を縮めて神に祈る気分だった。あとで聞けば、イタリア製の中古機という。

機内は満席だったが、乗客の中国人たちは神妙で

あった。新調の制服をきた若いスチュワーデスは、ハイクラスの公務員である。彼女らは、記念の小物入れを通路から座席の乗客に次々に投げ渡した。私たちには手渡してくれたが、サービスという習慣はないらしい。

空港を飛びたってから、幾度も窓外を眺めたが、茫漠たる薄闇がつづいていた。3時間余り、ようやく四川省の成都空港の仄かな明かりがみえた。私は、中国という広大な未開の大陸を実感した。

とっぷり暮れて、薄暗い空港。乗客の荷物が、飛行機の胴体から大きな荷台に乱暴に投げ下ろされる。興奮した乗客が争って、その積み重なった山に殺到し、四方から這いのぼって目当ての荷物を鷲掴む。その勢いに、金髪のお嬢さんが怯えて、私に涙ながらに一人旅の身を訴える。終戦後の買出し列車の記憶があったので、私は離れて騒ぎがおさまるのを待った。

そのとき喧騒のなかに、「ドクター・ナカハラ、ドクター・ナカハラ!」と叫ぶ声が聞こえた。乗客の群れをかきわけて、丸首にジャケット姿の旺盛な中国紳士が、私の名前を書いた白い紙を頭上に振りながら走りよってきた。——彼、華西医科大学の王 大章歯学部部長だった。

(写真は、華西医科大学構内にある歴史的な鐘楼を背にして、右から2人目に王歯学部部長)